

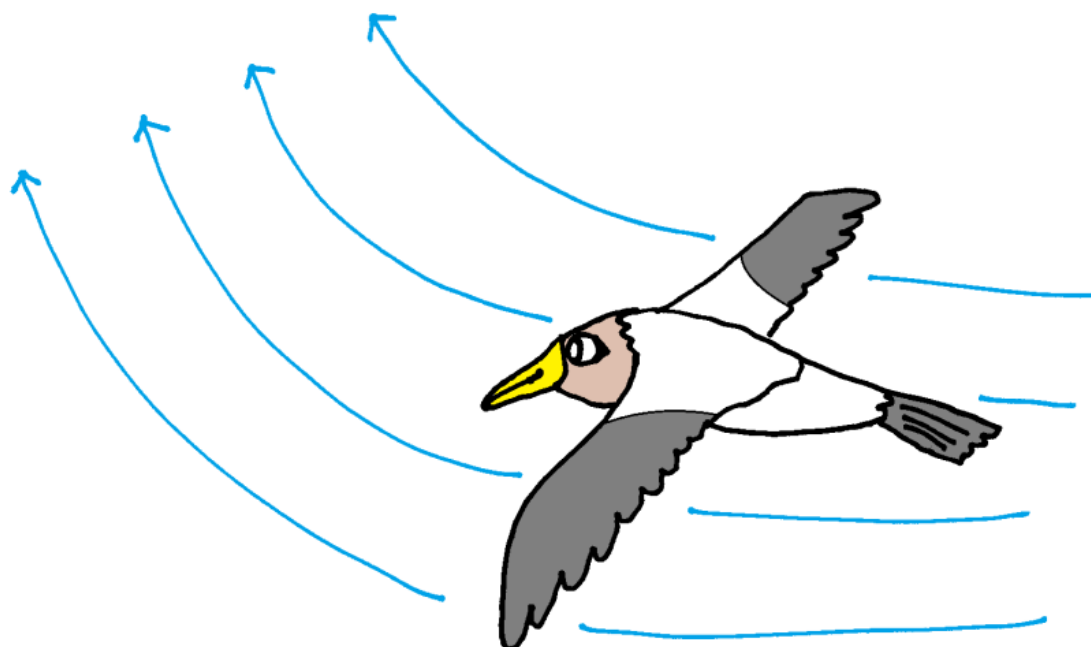
第2章 デビルビー登場

マインドウェーブの謎

フレンズたちはとっても長生きです。トナもデコも 200 年以上生きています。レタやクラウシアは 300 歳以上と聞いています。もう何年生きているかなどは知らないといいますが、最高齢は 500 歳を超えるといえます。これはヒューマニワールドの寿命の数倍の長さです。

その理由は少ないエネルギーで生きているからです。しかも豊かなマインドウェーブによって喧嘩もない平和な社会ができ、ストレスの少ない一層健康な生活で寿命の長さを保っているからです。

例えば不名誉な名前をもらってしまったアホウドリの例を考えてみましょう。実は名前とは打って変わってとても頭のいい鳥なんです。それは少ないエネルギーで飛行をする術を持っているからです。



アホウドリは自然に無意識のように上昇気流を捕まえては海面近く

を低空で飛行を繰り返し、3,000kmもの遠距離を飛行できるからです。とても人間の作った飛行機でできるものではありませんね。

そんな中で突然起こったエネルギーバランスの異常は、フレンズワールドの平和をいっぺんに乱してしまいました。同じ惑星チターの別のワールド、ヒューマニワールドで人工的に作られたエネルギーは膨大ですが、無駄も多くあまったエネルギーが負のエネルギーとして蓄積されてきました。

その巨大なエネルギーもヒューマンのマインドウェーブで消されることによりバランスがとられてきました。しかし、あまりにも大きくなった人工エネルギーの負の部分と、ヒューマンのストレスなどでのマインドウェーブの減少により、それができずにいます。その結果、負のエネルギーはヒューマニワールドから漏れてマイクロ次元を通り、フレンズワールドに来てしまったのです。



生活をエネルギーの少ない昔に戻せば問題は解決するのですが、ヒューマニワールドで発生した病気も同じ原因でした。不安やストレスが人間本来のマインドウェーブを減らし、花粉などの外的なものを極端に異物として、病気のような症状が出たのです。スピリアンはマインドウェーブの伝達物質です。フレンズワールドではこのいろいろなスピリアンが作用してフレンズの性格を作っています。

クラウシアの計算では 15%の人工エネルギーが減少すれば、後はスピリアンの力でヒューマンのマインドウェーブを復活させ、貯まった負のエネルギーを消すことができると計算されました。エネルギーの低減は実際には 30%必要です。まず 15%はナメリア合衆国の人工エネルギーを減少させます。後りの半分の 15% はスピリアンの力でヒューマンのマインドウェーブを復活させます。こうして 30%分のマインドウェーブの差し引きで、病気をおさえ負のエネルギーを消すことができます。しかしヒューマンのマインドウェーブを増やすことがカギとなります。

それが元に戻ればバランスがとれて、フレンズワールドのトナトン王国への影響もなくなるはずですが。少し昔の世界に戻っても生活に大差はないはずですが。マインドウェーブの調査のために作った帽子も、今やその負のマインドウェーブを消すことに役立ちます。それにはもっとたくさんのあの頭の良くなる帽子が不可欠ということがだんだんとわかってきました。

しかしそのマインドウェーブってなんでしょう。ここではそのマインドウェーブなるものを理解しておかなければなりません。一言でいえば【マインドウェーブとは人の心を同期させる波】と言えます。

<マインドウェーブとは>

- ♥人の心を同期させる波である。
- ♥良く寝ないと効きめが悪い。
- ♥リラックスしていると多く出る。
- ♥夢がないと出てこない。
- ♥夢は大きければ大きいほど良い。



フレンズワールドではこのマインドウェーブがいわば食糧であり、全ての源なのです。それが異変を起こしたのですから大変です。そのトナトン王国はどうなっているのでしょうか。そのようすをミツバチの郵便屋サーヤが伝えてきました。

トナたちがヒューマニーワールドに来てちょうど1ヶ月が過ぎました。トナトン王国はこの1ヶ月の間、やはりこれといったトナトンの収穫はありませんでした。

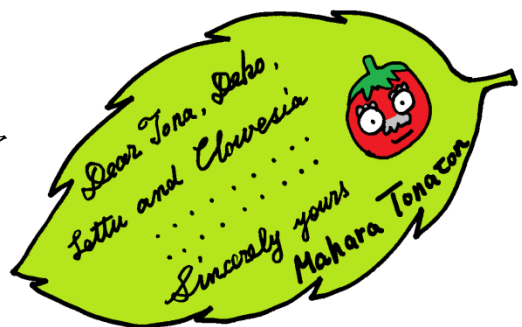
「このまま不作が続けば、秋のエネルギーに影響が出るトナ」

「困ったトン」

トナトンのフレンズは口々にそう言います。いつもの年なら秋から冬にかけての収穫を始める時期に来ているからです。

【みんなへの手紙】

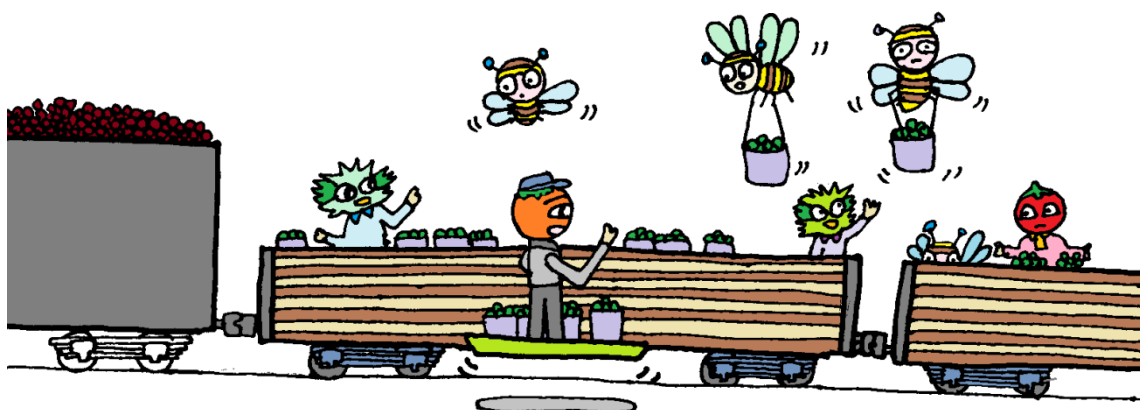
親愛なるトナ、デコ、レタ、クラウシア
げんきしちよるトナ？
こっちはげんきがないトン。



でもレタに頼まれた、ヒューマニーのマインドエネルギーを増やすための準備は進んでいるトン。はやくげんきになるトナ。

国王 マハラ・トナトン

実際、不思議な雑木林とつながっているレタ連邦の次元トンネルの近くでは、クラウシアの計算を元にレタが伝えてきた材料を汽車で送る準備が急ピッチで進められていました。レタやクラウシアに良く似たフレンズやトナトン、オレンシアから来たフレンズやだけでなく、ビッグドラゴンフライやタートルもみな助け合って作業をしています。



『準備は順調にいったるレタ？』

『うまくいったるトナ』

『だいじょうぶデコ』

レタ連邦の責任者がまとめています。

『必要なものを速く汽車に載せるレタ』

『わかってるチン』

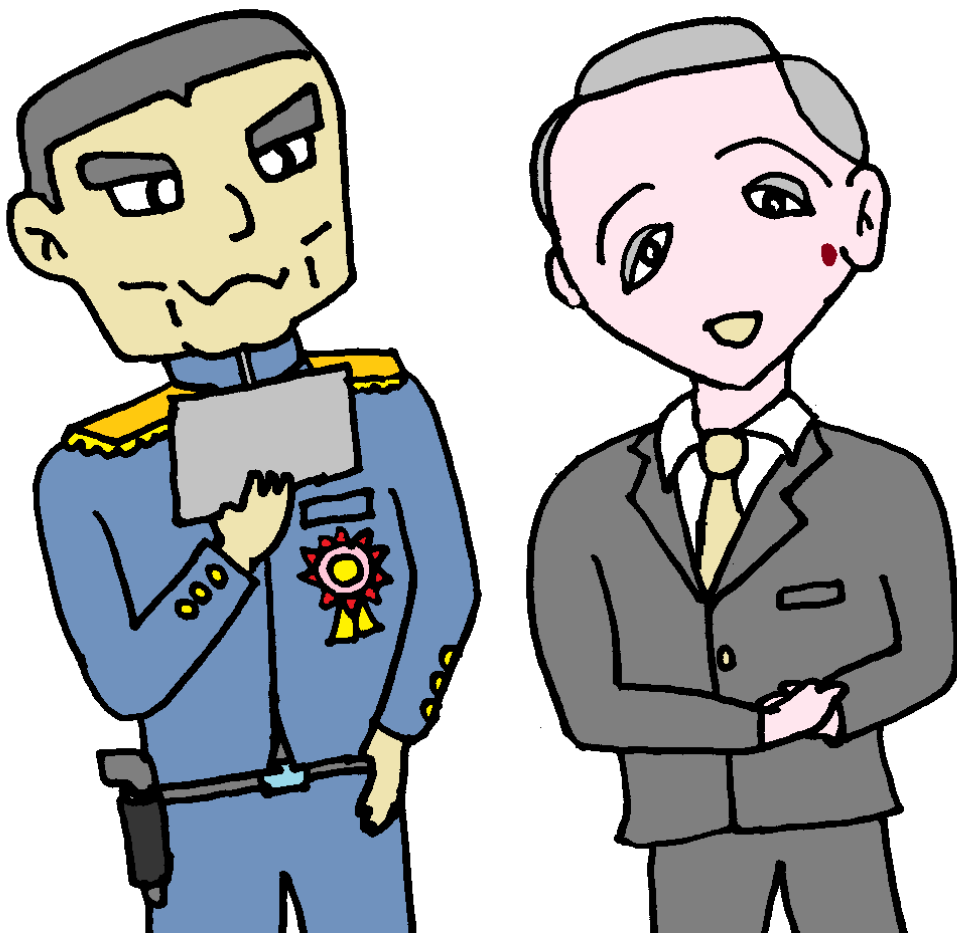
『ずいぶんな量トナ』

『しかたないデコ』

もう満月も新月を必要としません。光はグッドバグズたちが総力を挙げて、光るエネルギーゴケであるブルーモスを次々と運び続けています。これを満月の光に変わる光エネルギーとして利用します。

この間の新月に戻ってきた汽車にグッドバグズが、次々とブルーモスを運んでは植えています。まだ一度も試していません。そんな状態ですが急いで準備をしています。準備ができ次第出発します。

ところでその行く先のマロン村の不思議な雑木林に、軍の責任者や軍需関係者がここに来ていました。そして数人で林の中に入って行



きます。大統領が話をもらさなくても、病気の原因がマロン村から発生したことを疑う人はいます。

何かを感じてめざとく利益にしようと思ったのでしょうか。不思議な雑木林が、未知のエネルギーで満ちており、新しい武器になるのではと、軍関係者に話を持ちかけた悪徳業者がいたのです。

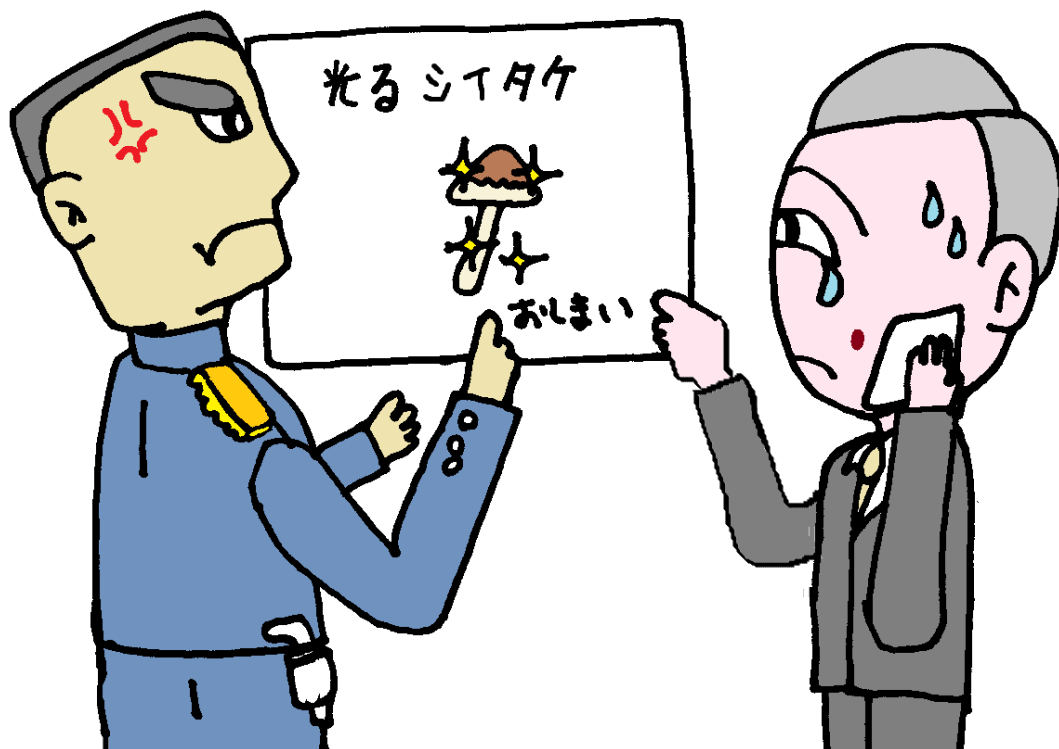
「なんの変哲もない林でないかい？」

軍関係者の1人がいいました。

「それが秘密があるんでさあ」

武器商人の1人がいいました。

「ありえない話でんな。木が武器になるなんてことはでんな」



別の軍関係者の1人も、同じことをいいます。

「きのこが光っているだけじゃないでっか？」

「すごいエネルギー体のはずですぜ。すぐ調べてみますぜ」

とって武器商人は顕微鏡をパソコンにつなぎ、データベースと照合しました。

【これは光るシイタケです】

「あほな武器商人にだまされましたな」

「ばかばかしい。小学校の理科の観察会でしたな」

軍関係者は、そういつて帰って行ってしまいました。こういうこと
もあろうかと、レタが林のきのこに、光るスプレーをしておいたの
でした。

フレンズの大宴会

今日は6月16日の土曜日で学校はお休みです。エイミーもバーバ
ラもトミーも不思議な雑木林に集まっています。

「バーバラ、トミー、ちゃんとお弁当持ってきた？」

「持ってきたわよ。だってフレンズのマインドウェーブじゃお腹は
膨れないもんね」

「フレンズの国にいたらごはんはいらさないんだよね」

『今日はみんなのためにパーティーを開くニ』

『トナトンを出てもう1ヶ月だわ。トナが心配だったからいいアイ
デアね』

デコもレタもクラウシアもトナを囲んでいます。スカイブルー隊長やブルーシルバーらのビッグドラゴンフライ、ミツバチのサーヤもいます。

『みんな心配してくれてありがとう。今日は久しぶりにデコと一緒に歌を歌うわよ』

『まかせておいて。で、何をうたうの？』

『まずはこのオラッチのこの歌よ。でもデコが歌ってほしい二』



デコがマイクを持って言いました。

『これって男のラブソングなんだけど、女性ボーカルがいいんだ二』

『そう、ちょうど、土曜日トナ』

「土曜日？」

『そうだ二。‘土曜日の夕暮れ’って歌だニ』

「デコさん、ボーカルなんだ♪すごいねっ、バーバラ」

「でも3人足すと700歳のバンドなのね、エイミー」

『ボクにゃんを足すと1,000歳になるにゃん』

「.....」

土曜日の夕暮れ(フレンズのパーティーの歌)

C Dm7 G7 C Dm7 G G7

土曜日の 夕暮れは 君を迎えに行くよ

C Dm7 G7 C Dm7 G G7

それまでに おしゃれして 化粧もすませておいて

Capotasto ⇒ 3 Fret



F Em F Em

パーティーは これからさ もうじき 始まるよ

F Fm Dm7 F G G7 C G7

みんなで 歌って 弾ける夜は これからさ

C Dm7 G7 C Dm7 G G7

道ずれの 星たちも 一緒に誘って行くさ

C Dm7 G7 C Dm7 G G7

光さえ 今はもう 時を忘れた夜さ

間奏 Cmaj7 Dm7 ...

Refrain ※

C Dm7 G7 C Dm7 G G7

パーティーは これからさ もうじき 始まるよ

F Fm Dm7 F G G7 C G7

君と二人で 始まる夜は これからさ

Refrain ※



「土曜日の夕暮れに彼女を呼びに行くのね」

『ミーもはやくお嫁さんがほしいサーヤ』

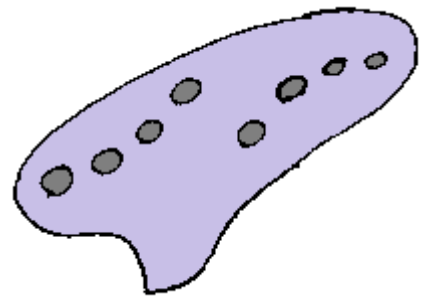
『スカイブルー隊長殿、まあ、一杯やっってください』

ブルーシルバーが上司であるスカイブルーにゴマをすっています。他のフレンズも、やいや、やいやの大声援です。デコが歌を歌うなかで、エイミーも笛でそっとその音を追っかけています。

「エイミー、いつのまに吹けるようになったの？」

「ほんとだ、おいらと違いやっぱ学級委員だね」

「毎日家に帰ったらこころの木さんの前で練習してたわ。唇で吹こうとしてもだめなの。こころで吹きたいって思ったら音が出たのよ」



「わたしと似ているわ、エイミー」

そうやってバーバラは持ってきた大きな風呂敷を開けました。なかから額に入った絵がありました。それをトナに渡しました。

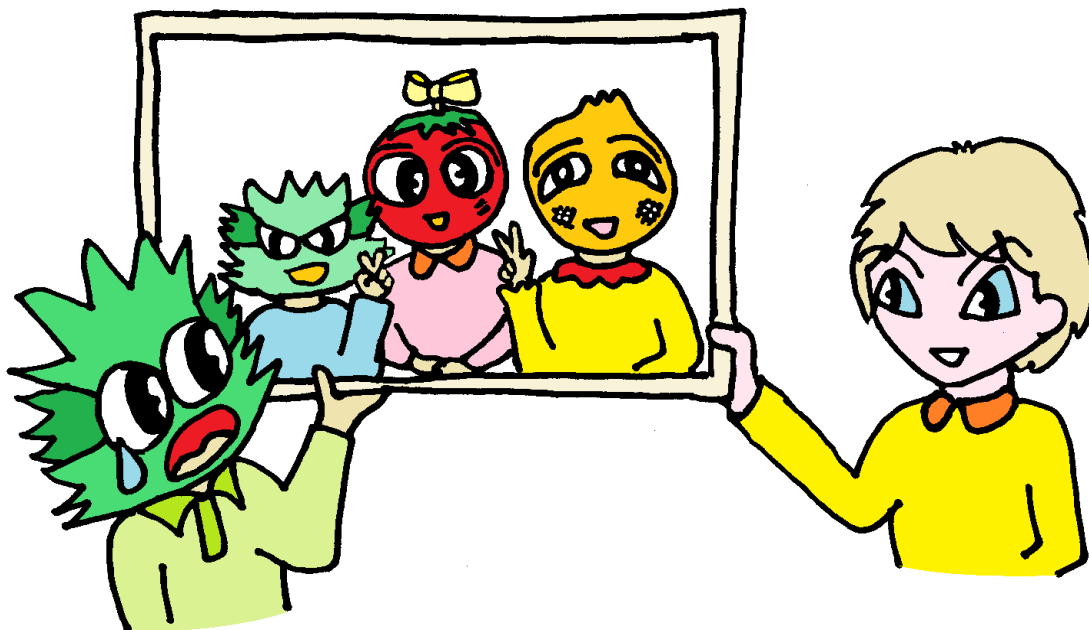
「トナさん、これをどうぞ」

トナをまん中にデコとレタが描かれていました。

『ボクにゃんがいないにゃあ』

「ごめんなさい。レタさんと似ているから3人にしたわ」

『いいよ、いいよ。ボクにゃんはレタの影武者みたいなものなんだ』



「やれやれこんなこともあるかと、おいらも持ってきたんだ」

「トミー、何を持ってきたというの」

「バーバラと同じ東洋の物だよ。風呂敷もヤパニーズならこれもそうだよ」

そういつて出したものは真っ赤なふんどしでした。

「ど、どうしたのよ、そんなの」

エイミーがたずねました。

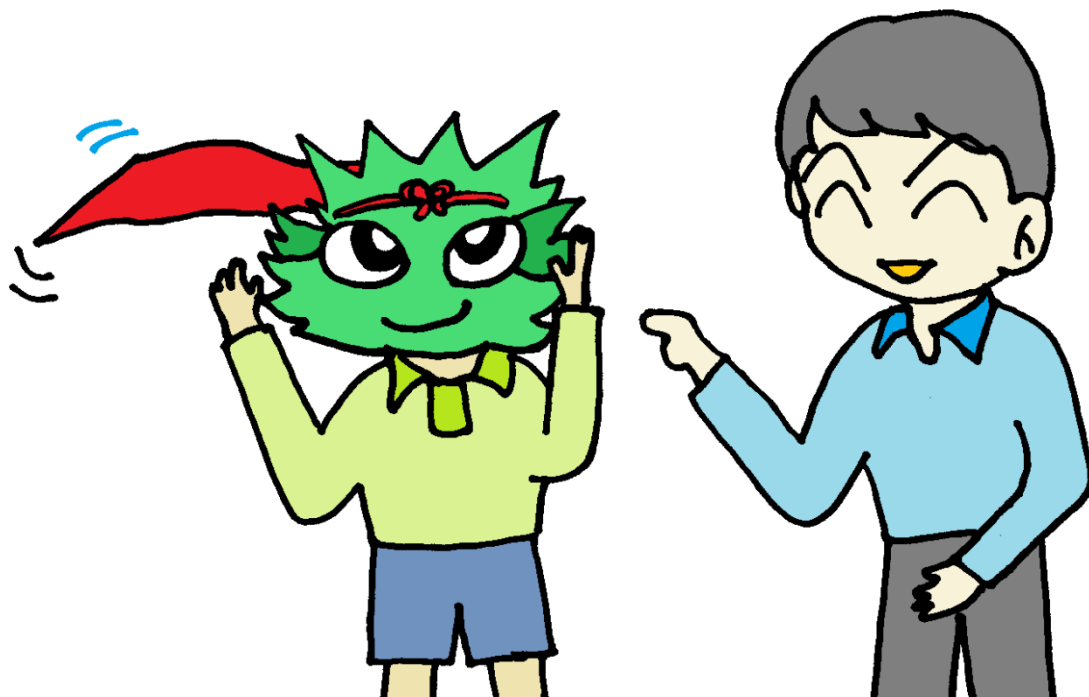
「これはサムライが身につけるカブトっていう大切なものなんだ。これをクラウシア君にあげるよ」

『ボクにゃんにこれをくれるの？』

『クラウシア、よかったニ。で、どこにつけるのかニ？』

『トミー、ここでいいかにゃあ』

そういつてクラウシアはその赤フンを頭から後ろに垂らしひたいの前でひもで縛りました。



「トミー、そこにつけるの？」

バーバラが聴きました。

「そ、そうだよ。た、たしかそこでいいと思うよ」

『いい根』

トナがクラウシアをみてほほ笑みました。

『いい根、いい根、いい根』

みんなも大喜びで大宴会は進んで行きました。

「トミー、なかなかやるじゃない。見直したわよ」

「バーバラ、そんなこと言わないでよ。照れるじゃないか、おいら・・・」

「さすがにヤパニーズのサムライのことだけはよく知っているのね」

エイミーもトミーの感心しきりです。

「今度はトナさんのためにわたしのバアが作った歌を歌うわ」

エイミーはかたわらに笛を置いて円座になっている真ん中に行きました。



しあわせはやってくる

C Dm7 G7 C G7

人は昔を振り返り 何度も自分に問いかける



C Dm7 G7 C

苦しいことや悲しいときに 何がいけなかったのかと

F Fm C Dm7 C G7

前に向かって進めば 小さな木に会えるだろう

F Fm C Dm7 G7 C

きっとすてきな花も実も そこには咲いているかと

(間奏) Dm7 G7 C

C Dm7 G7 C G7

人の悩みは尽きないけれど わたしもその一人

C Dm7 G7 C

それでも毎日生きている みんなと一緒にいるから

F Fm C Dm7 C G7

こころがひとつになれば 大きな木になれるだろう

F Fm C Dm7 G7 C

きっとしあわせはやってくる きっとわたしのもとへも

Dm7 G7 C

きっとわたしのもとへも

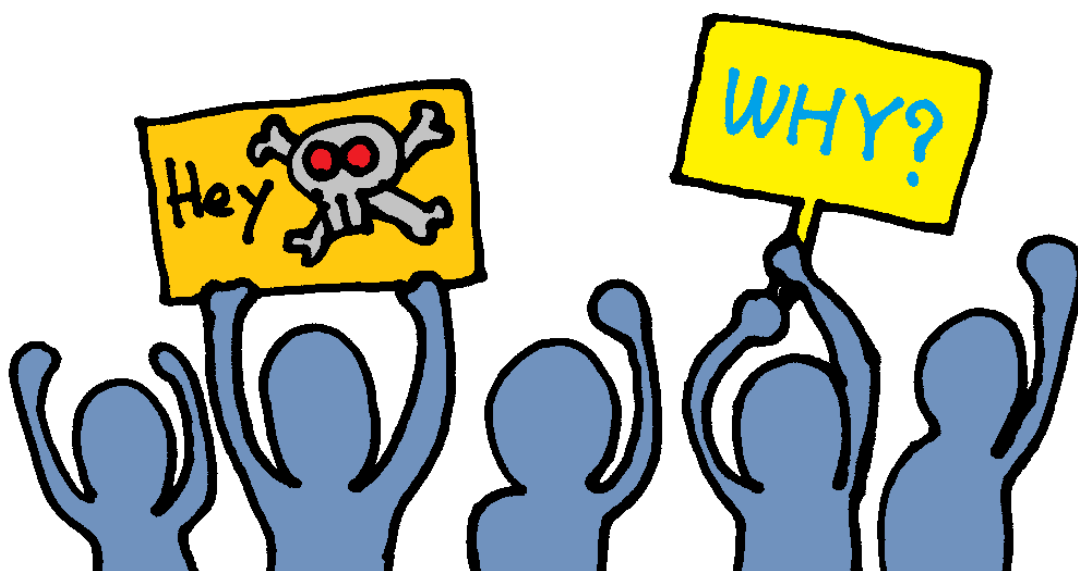


首都のデモ

ナメリアの大都市のあちこちで病気に対する対策の遅れに対し抗議デモが起こっていました。かなりの地域にマロン村シンドロームが蔓延してきたのです。

「政府は一体何をやっているんだ！」

「インフルエンザがこんな時期に流行るなんておかしいじゃないか」



「あのおしゃべりなうちの子なんて、何もしゃべらなくなってしまったのよ。どうしてくれるのよ」

いろいろな場所で同じようなデモが起こっています。マロン村で病気のパニックが目立つようになりおよそ4週間の日が経っています。カナディ大統領は官邸の窓を見ながらつぶやきました。

「たしかにスピリアンの効果はあった。マロン村はほぼ病気は終わったし、マロン村のあるビッグロック州もほぼだいじょうぶだ。しかしなにぶんスピリアンの量が足りない」

そこへ補佐官があわただしくは入ってきました。

「だ、大統領閣下、こ、この手紙が、というか葉っぱの手紙が届きました。たった今です・・・」

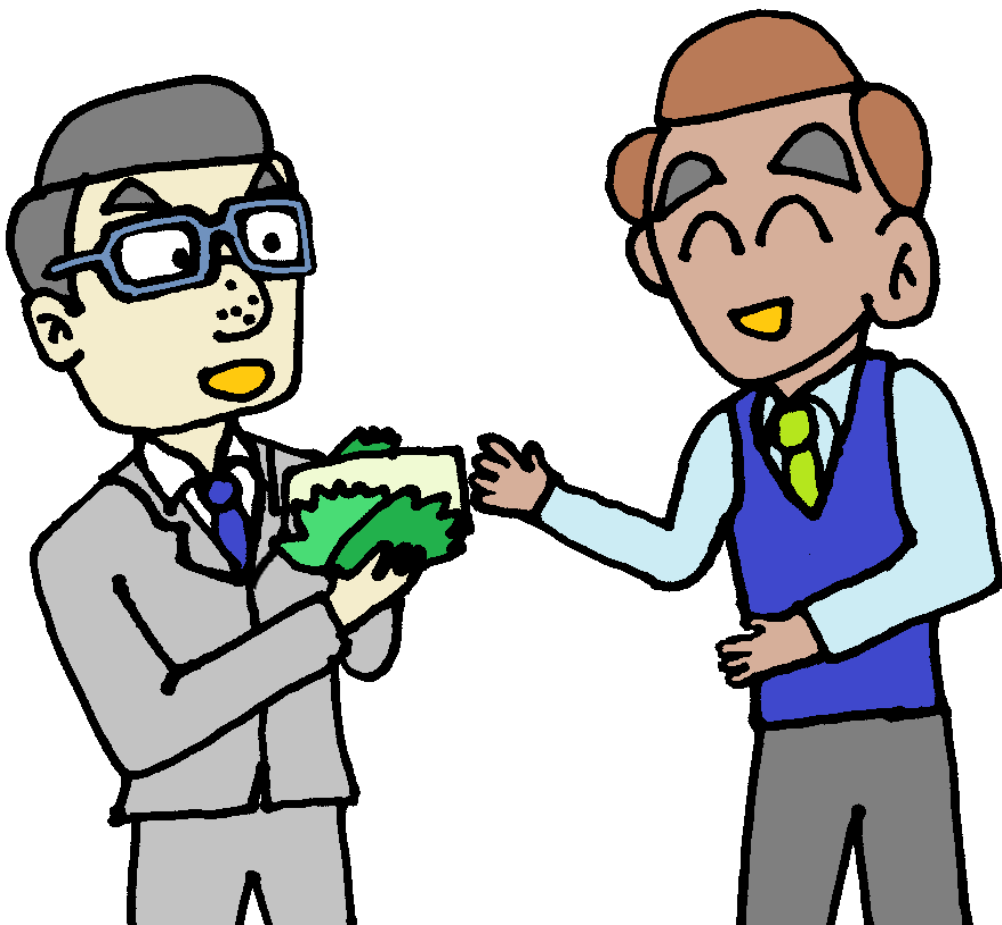
「そ、そうか。それを待っていた」

大統領はそう言うと急ぎその手紙、いや5枚の葉っぱに書かれた内容を読みました。そこには絵が描かれていましたが、どうもあさってフレンズが大量のスピリアンを持ってやってくるらしいのです。

「だ、大統領、良い知らせでしょうか？」

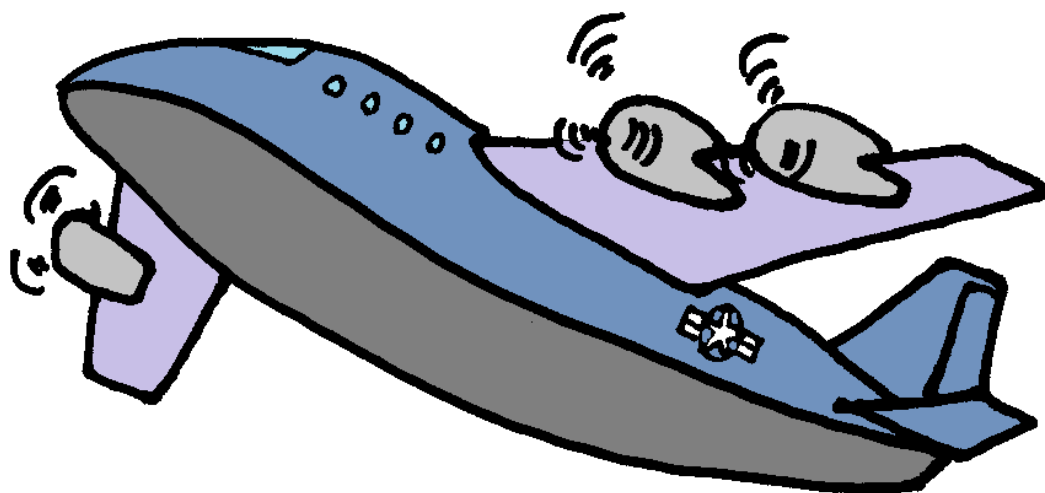
「おそらくな。きみも読みたまえ」

そういつて大統領は補佐官に数枚の葉っぱを渡しました。最初の1枚目は大統領らしき顔が、2枚目にはサーヤと思われる顔が、3枚目



には大きなハスの葉に載せられたコケのようなものが、4枚目にはレタのような顔が描いてありました。そして5枚目に「June 20th」とあり大統領は明後日の6月20日にフレンズたちの応援がやってくると理解したのです。

【まだみたこともない友だちか？どんな姿なんだろうな？】



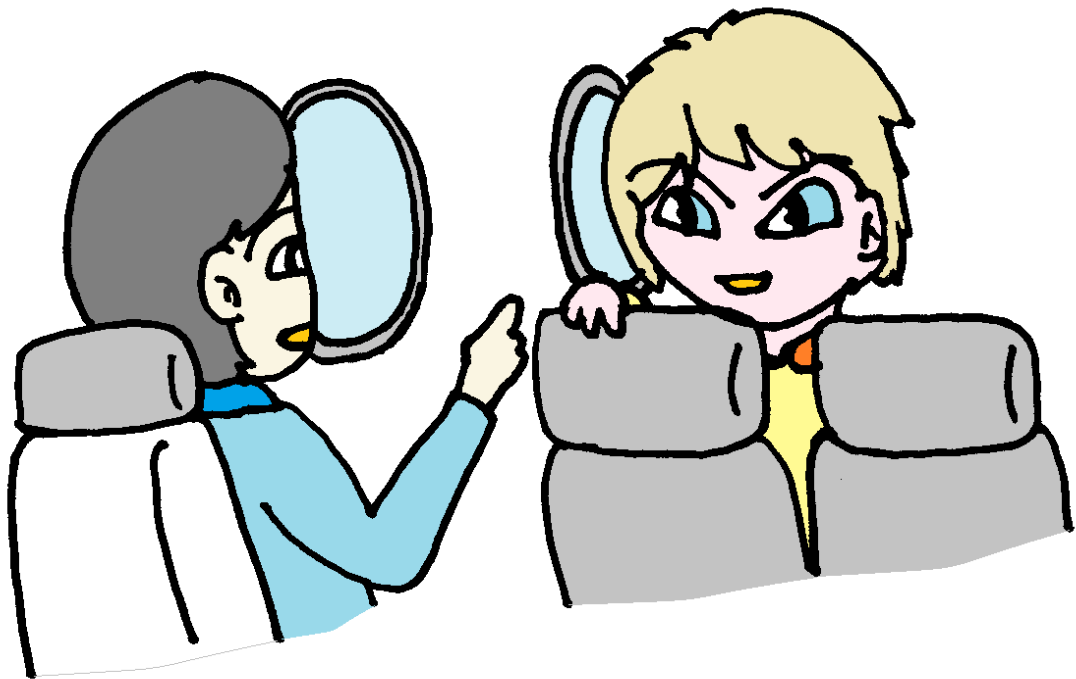
西に広がる大砂漠地帯にレッドフォード空軍基地があります。既にエイミーたちが荷物を出迎えに来ていました。サーヤたちのおかげでビッグドラゴンフライによってマロン村の雑木林から必要な荷物を運びこみました。これから先はナメリア合衆国の空軍の仕事です。

6月20日はまだ学校のある日ですが、エイミー、バーバラ、トミーの3人は、学校を休んで、空軍の輸送機で首都に向かいます。トミーはなんかこう、遠足気分です。

「おいら、なんかこう、またわくわくしてきちゃったな」

「あんた、こんなときにバカね、ほんとうに」

そこへ、大統領から貨物機内に連絡が入りました。そして深刻な首都のデモの状況を機内アナウンスしています。大統領の声です。



「ナメリアは民主国家だ。電力の15%を減らすのに、国民が納得する理由が必要なんだ。わたしも全力で戦うが、エイミーを始めフレンズやみんなの協力が必要だ」

「大統領が話しているよ」

首都デザト・シティまで2時間半の空の移動です。

「ごめんね。急なことだし荷物もあるしで、輸送機の旅になっちゃったね」

ガイドの空軍少将が、みんなにいいました。輸送機にはこころの木や、スピリアンが載っています。それを首都まで運んで、みんなに

こころの木のお話を教えて、マインドウェーブを高めることになっています。

「でも輸送機っていったって、座席もスゲーし窓から外も見えるし、乗りごごちは悪くないぜ」

「あんたはもうだまって外でも見てなさい、ねえエイミー？」

バーバラがひとこと多いトミーを少したしなめています。

「あたいたちは、この国が滅びてしまうかどうかという役目を持っているの。バーバラもトミーも本当にがんばってね」

エイミーは、隣のバーバラと、窓際で外を見ているトミーにいいました。3人はマロン小学校から特別の規則で、授業の単位を落とすことなく参加しています。それもそのはずです。マロン小学校に、カナディ大統領から直接の特使が来て、校長先生に対応を頼んだのです。

「ええ～～？エイミー・フォーリーブス、バーバラ・オリオン、トミー・ラディッシュにそんなことができるのですか？……もっ、もちろん喜んでお貸し、いや、行ってもらいますよ……」

校長先生は喜んで、3人を使いに出したのです。輸送機は一路、首都に向かっていきます。各々（おのおの）の思いは、なんとしてもこの危機を乗り越えることです。いよいよ首都が近づいてきました。2時間半の間でしたが、デビルビーの攻撃も心配される中、首都の国内線発着空港ナッツヒルに到着します。

「ご登場の皆さま、こちらは合衆国特別便 110（イチマルイチ）の機長、ラルフ・パーマーです。機は後 20 分で目的地、ナッツヒルに到着します。今一度シートベルトを確認して、着陸に備えてください。長い間、お疲れさまでした。……あっ、そうそう、空港に着いた

ら大統領が、エイミーに連絡するっていったよ。なんか特別な方法でね。・・・それではこれで機内放送を終わります」

機長はなにかを、エイミーに伝えたかったようです。機はだんだんと高度を下げ、ナッツヒル国内空港への着陸体制に入りました。

大統領のこころの木

ナメリア合衆国ではとうとうデモは首都まで到達し、あちこち大規模なデモが起こっていました。マスコミもそれに乗じて、政府の対応を攻撃しています首都ではデモがひんぱんに起こっていました。

「どうして電力をカットするんだ！」

「情報を公開しろ！」

「われわれは何も知らない！」



エイミーたちは、空港に出迎えた政府の自動車に乗車し大統領官邸に向かっています。そのいたるところでデモ隊と遭遇し車は前に進めないこともありました。そこへサプライズな出来事がありました。

【エイミー、わたしだよ。わたしはわかるかな？】

エイミーは突然の呼ぶ声に、

「誰っ？」

と、自動車の中で声を出してしまいました。

「誰だろう？」

「かばんがすこし光ってるわ、エイミー」

「えっ？これっ？こころの木？」

エイミーは、あわててかばんを開けて、大切に持っている10センチメートルほどの、小さな心の木を取り出しました。こころの木は折れたり葉が、落ちたりしないように、少し大きな籠の中に入っています。エイミーはその籠のふたをそっと開け、こころ木を自分のひざにのせました。



【エイミー、わたしだよ】

「だれ、・・・？えっ、まさかっ・・・？」

【そう、そのまさかだよ】

「大統領？」

エイミーは少し大きな声で話してしまいました。横でバーバラとトミーも誰だかがわかったのか、少しほほ笑んでいます。こころの木だとわかって、エイミーも目を閉じて、こころの木で話をします。

【話ができるようになったのですか？】

【そう、あれからずいぶん練習をして、ボクのこころの木が、ボクのいうことを聞いてくれるようになったんだよ】

【大統領、すご～～～い】

エイミーたちには、本当にうれしいサプライズになったようです。そして3人は大統領執務室の別室に入って行きました。



「やあ、みんな、エイミーもご苦労さん」

大統領が補佐官と一緒に、出迎えてくれました。エイミーは、そつと向こうの部屋を見ると、怖そうなおじさんたちがいっぱいいます。恐る恐る大統領に聞いてみました。

「あの人たちは何をしていますのですか？」

「病気の対応としてはずいぶん、怖そうな人たちだわ、エイミー」
バーバラも言いました。

「あ、ああ。実はそのことなんだが、補佐官、ドアを閉めてくれたまえ」

大統領はその執務室にいる大人たちに見られないように、この別室とのドアを閉めました。

「おいら何かただ事ではないような感じがするよ」

「実は君たちには話さなかったのだが、病気以外に大変なんことが起こっているんだ」



「病気以外の大変なこと？」

みんな一斉にそれぞれの顔を見ていました。

「ナメリアの最新鋭戦闘機が、もう 10 数機も撃墜されているんだ」

大統領がいました。

「戦闘機が・・・？」

「それは初耳ねえ」

エイミーもバーバラも首をかしげました。

「病気との関係はないだろうから君らには相談しなかったんだ」

「順を追って説明します。大統領、よろしいでしょうか？」

補佐官が言いました。

「ああ、そうしてくれ」

そういつて、大統領は椅子に座りました。

「・・・・・・・・というわけなんですよ。どこの国の兵器なのか？隣の部屋では喧々諤々（けんけんがくがく）の喧嘩になっていますよ」

デビルビーの正体

「思い当たることがあるよ」

突然、トミーが大統領に言いました。

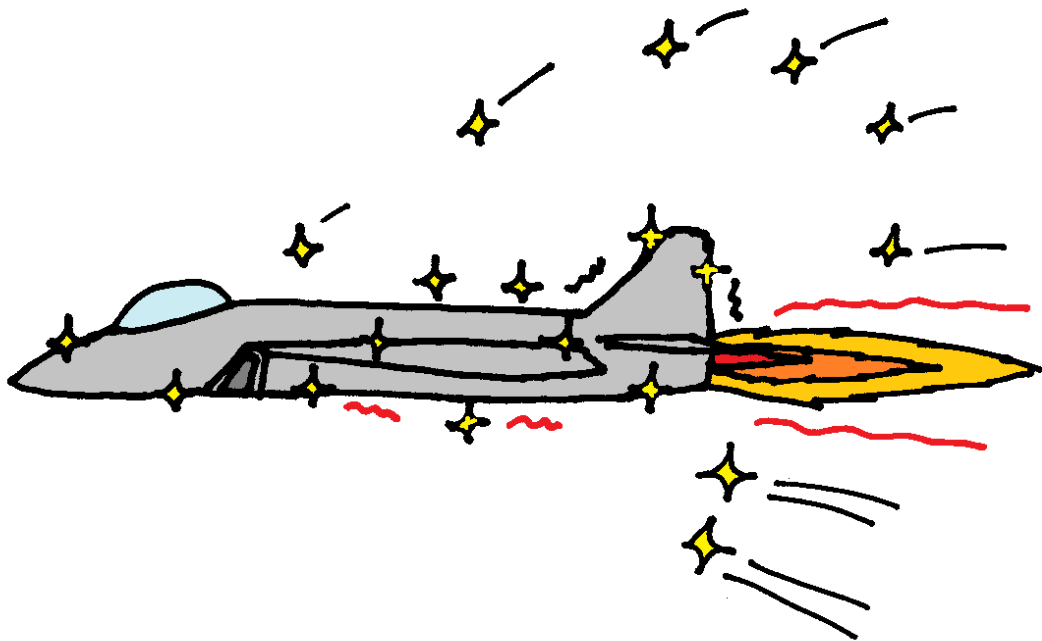
「大統領、1つ考えられることがあります。ひょっとしてミツバチが戦闘機にまわりつくんじゃないかって」

「あんたまたバカなこと言わないのよ」

「トミー、そうよ、ここは大統領官邸なのよ」

「だ、だけど、おいらもあれからこの本に一生懸命レタ君たちの事を書いていったんだ。そうしたらほらこれを見てよ」

そこのトミーが開いた本には、飛行機のようなものに光が吸い寄せられるような絵がありました。そしてスピリアンをまとったミツバチが集まって光っていると書かれていました。



「あんたまた自分勝手な絵を描いているの？」

「ち、ちがうよ、バーバラ。おいらは日記のようにこの本に毎日のできごとを書いて行ったのさ。そうしたら昨日の夜とつぜんこの絵が現れたんだ」

「じゃあ誰が描いたって言うのさ」

エイミーもたずねましたがトミーは首を横に振っています。

「でもひょっとしたらあたしが笛が吹けるようになったり、バーバラも絵が描けるようになったように、トミーもこの本が使えるようになったんじゃないかしら」

「でもおいらがいくら絵が下手だからって、ここまでひどくないけどね・・・レタ君が描いたような絵だよ」

そのやり取りを聞いていた大統領が椅子から立って言いました。

「そうか！虫が病気を感染させたのかと思っていたが、戦闘機にも影響したか」

「だ、大統領・・・」

補佐官がドアが開いて、入ってきた男を指さしていました。

「ア、アイムシュタイン所長」

エイミーたちは驚いて言いました。



「やあ、久しぶりじゃのお」

「おじいちゃんが、こんなところにまたなんで・・・」

トミーが聞きました。

「またなんでとは聞き捨てならんな。お前さんらが薬にするからちゅーて、ワシは一生懸命この木を育てとったんじゃがのう」

「あっ、博士、これは失礼しました」

大統領が挨拶しました。大統領は先日エイミーから紹介され、マロン村を視察した時にアイムシュタインの研究所に寄ったのでした。

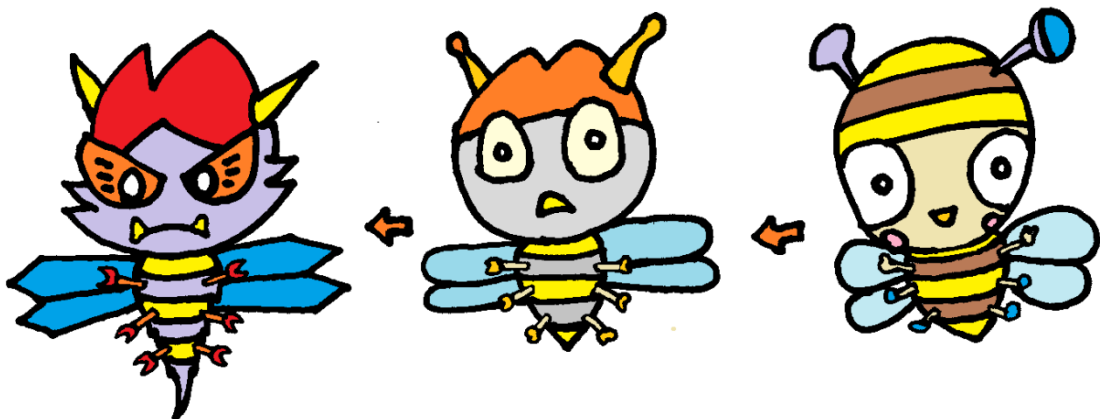
「ま、博士じゃなく百姓じゃが、まあいい。トマトの不作と戦闘機の墜落には、同じ原因があるんじゃよ」

「と、いいますと・・・どんな？」

大統領はアイムシュタイン所長に聞きました。

「ミツバチがいなくなったのじゃなくて、恐ろしい虫に変身しておったのじゃよ」

「恐ろしい虫に？」



「そうじゃ。おそらくスピリアンの力をかりて、世にも恐ろしい姿になったんじゃよ」

アイムシュタイン所長はそういって、地球の形をしたバッグに入れてきた死んだ変身ミツバチを見せようとしてました。

「あれっ？どこに入れたっけな？バッグにもないしな。そうそうここじゃよ」

そういってカーボーイハットを手にとって、帽子のポケットに入っていた、死んだミツバチを取り出しました。

「これがそれじゃよ」

「こ、これは・・・」

それはとてもミツバチとはいい難く、先は鋭くとがり、まさに戦闘機のような姿をしていました。



「どうしてこれがわかったのですかな？」

大統領はたずねました。

「なあに、うちの子たちがミツバチを捜しにいった、捕まえてきたんじゃよ」

「うちの子たちって？まさか？」

エイミーが聞きました。

「そう、フレンズくんたちじゃよ。みんな元気で仕事をしちよるよ」

「そりゃ、フレンズは長生きだからねえ」

バーバラがいました。

「そ、それで、博士、このミツバチがなぜ・・・？」

大統領があわてたように質問しました。

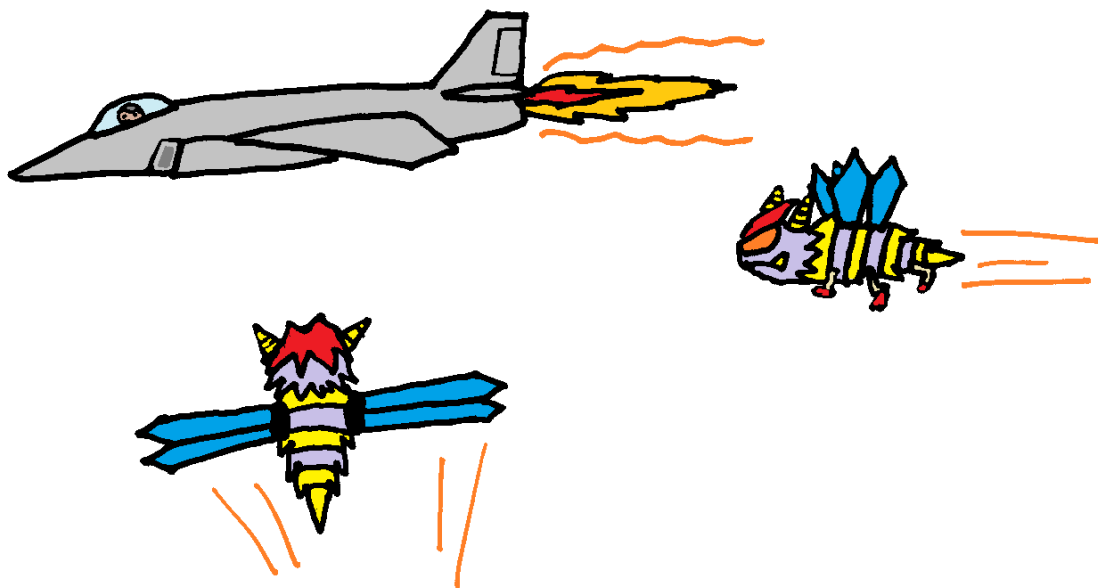
「百姓の感じゃがのう。ミツバチも集団になるとわしらのように、知恵のある社会生活をするのでのう。悪いのに誘われて、おいしい餌を採るつもりなんじゃろ？村でのトマトの不作もこいつのせいじゃよ」

「戦闘機がトマトよりおいしい餌ってわけか」

大統領は手を叩いてうなずきました。

「ふざけたミツバチですね」

補佐官がいました。



『そうであれば手は打てる二。ちょうど反スピリアンもたくさん持ってきた二』

「レ、レタ君・・・？」

トミーが思わず本を落としそうに目を見開いていました。

「ト、トナさんにデコさんもいっしょ？」

エイミー、バーバラもびっくりして言いました。

「そう、こうしてみんなを連れて来てやったわい」

アイムシュタイン所長は外にいるみんなを中に呼びました。



「あれ、クラウシアさんは？」

少ししてクラウシアも入ってきました。

『もうボクにやんのサムライのカブトが人気だからみんなが見て笑ってくれるにやあ。とても気分がいいにやあ』

「そ、それはよかったわね・・・」

「ご、ごめん、クラウシア君・・・じ、じつは・・・」

「トミー、いいのよ。もうあのままカブトって言った方がいいわよ……」

「そ、そうだね、バーバラ……」

「きみたちがフレンズなんだね。はじめまして。そうとわかったら作戦開始だな」

大統領は大きな声で言いました。

「少し待っててくれ。向こうに行ってみなに説明してくる」

そう言って大統領は別室を出て執務室に行きました。後を補佐官が追って行きます。

「おじいちゃん、元気だった？ね、バーバラ」

突然、トミーがいました。

「またおじいちゃんだなんて……」

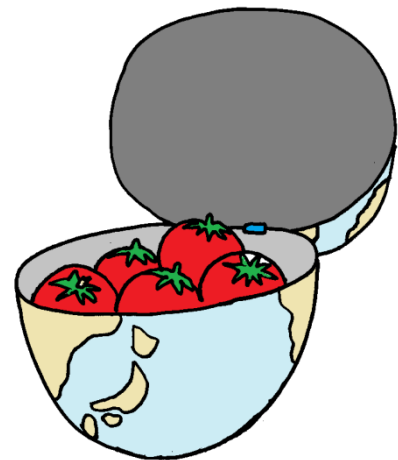
「ははは、いいんじゃ、いいんじゃ。ワシあ、子供たちがでやーすき（大好き）だでのお」

「ところでその持ってきた地球のようなバッグはなんだったの？」

エイミーが聞きました。

「ワシの作ったトマトを食べて元気出してもらおうと思っての。持ってきたんじゃよ。愛は地球を救うでのお。バッグをデザインしたんじゃよ」

「アイラブユーのアイムシュタイン所長ね」



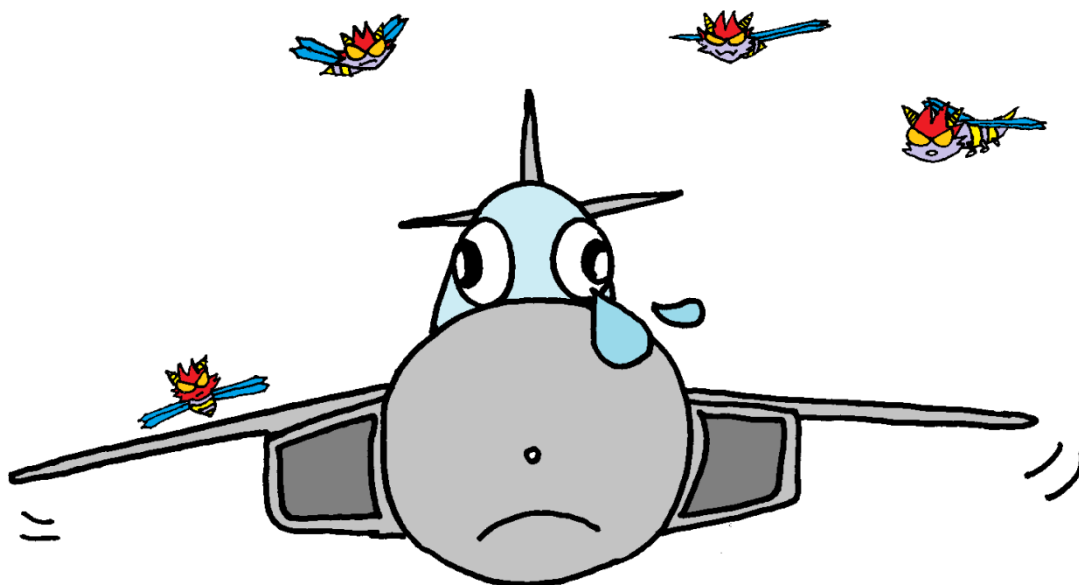
しばらくみんなで所長を囲んで話をしていました。そこへ大統領が戻って来ました。

「みなに説明した。大統領命令でな、エッヘン」

「みんなは、なんていったたのですか？」

エイミーが聞きました。

「なんで最新鋭の戦闘機が虫にやられるのかって、参謀総長なんか涙目だったよ」



「納得してくれたのですか？」

トナも聞きました。

「納得も何も大統領命令さ。エッヘン、あっ、いや、エ、エブリバディ OK だったさ。ところで作戦計画を立てないとな」

『作戦はもうオラッチたちが進めてる二』

レタがいました。

「作戦名はなに？」

トミーがいました。

「あんた、こんなときに作戦名なんてどうでもいいの」

バーバラがいました。

「そうだな、作戦名がほしいな」

大統領がいました。

「どうだ、エイミー。何かいい作戦の名前がないかな？」

「えっ、あ、あたい・・・？」

「そうだ、そうだ、学級委員のエイミーなら、いい名前がつけられるよ」

トミーがいました。

「それだけは、わたしもトミーに賛成するわ」

バーバラも、うなずきながらいました。

「作戦名・・・作戦名ねえ・・・、なかよし・・・、フレンズ・・・」

エイミーは少し考えていましたが、大きな声でいました。

「そうか、フレンズか？フレンズだから [トモダチ大作戦] っていうのはどうかしら」

「トモダチ大作戦？」

「トモダチ大作戦か。いい名前だ。よしそれにしよう」

そうやって大統領は白い壁に向かって、字をかきました。

[O p e r a t i o n T o m o d a c h i]



「もちろん病気の治療もこの作戦と同じだよ。いい名前だ」

そういって大統領は、また執務室に戻って行きました。[トモダチ大作戦]の作業が、急ピッチで進んでいきます。戦闘機のミサイルは反スピリアンを搭載できるように、改造されました。送信機は出力を最大にし、今、問題になっているデビルビーの共振周波数に、同期するように改造されています。レッドフォード空軍基地に到着したスピリアンや、反スピリアン、こころの木は、急いで各々（おのおの）の空軍基地や、国内空港に輸送が始まりました。スピリアン、反スピリアン、こころの木もすべて量が足りるわけではありません。

しかしアイムシュタイン所長の研究所では、ありあまるほどのこころの木が生長していました。スピリアン、反スピリアンはフレンズたちが取りだして、ビンに詰めていきました。

そして病院では患者が、こころの木とお話をするのが重要です。

「おいらも先生になっちゃったね」

トミーが恥ずかしそうにいます。レタとクラウシアを除く5人は、デザト・シティ大学病院に向かいました。レタは執務室で大統領の補佐をします。5人はうまくこころの木の話し方を、教えられるのでしょうか？

